令和５年度「防災ラジオドラマ」
シナリオコンテスト応募

# 潮騒が聞こえる

登場人物一覧

山本康太（５５才）
徳島市内の会社に勤めるサラリーマン

山本花子（５３才）
康太の妻。専業主婦

母（義母）（９５才）
康太の母

同僚（４２才）
康太の職場の同僚

「潮騒が聞こえる」概要

康太は、市内のとある港町で、妻花子と母の３人でごく普通の暮らしをしていた。

そんなある日、康太が職場でいると、携帯の緊急地震速報とそれに続く大津波警報が鳴り響く。南海トラフを震源とする大地震が発生したのだ。　職場の災害備蓄で急場をしのぎ、自宅に帰るが、そこには津波ですべてが押し流された自宅跡があった。急いで、地域の指定避難所に駆けつけ、受付の名簿に妻と母の名前を探すが・・・。

（おわり）

N　「ここは、徳島市内の小さな港町。」

康太「ハアア・・・」

N　「康太は、深く溜息をついた。

静かだ。

何も聞こえない。あれだけ騒がしく鳴いていたセミの声も。

近くの保育園の園庭で遊ぶ、子ども達の歓声も。

空は、透き通るような真夏の青。

白い雲とのコントラストが眩しい。

康太は、自宅があった瓦礫の山の傍に立って、周りをやつれた眼で見渡した。　もはや、大きく遮る物が無く、むき出しになった海岸に打ち寄せる波の音が虚しく、耳に響いた。」

まな板で野菜を刻んでいる音。妻の

花子が、夕食の準備をしている。

スマホで、動画配信を見ている康太。

康太「ハハハハ。この霜降り流星の動画、面白いよ。君も見る？」

花子「ねえ、パパ。今日、町内行事で防災の研修会があって、行ってきたの。」

康太「そう。」

花子「防災の準備、なにか、してる？。災害に備えて、非常用の持ち出し袋、用意しましょうって言ってた。

康太「うん。」

花子「聞いてる？　やる気ないでしょ。」

康太「やる、やる。」

花子「もう、お願いよ。」

スマホの動画を見ながら、生返事をする康太。

康太「ハハハ。」

花子「もう。」

康太の職場。職場の喧騒。パソコンをにらみながら、かかってきた電話を取る康太。

康太「万代産業の山本でございます。ああ、昭和商事の平島課長、いつもお世話になっております。暑いですねえ。お元気にされてますか？例の見積りの件ですね。早急に提出させていただきます。はい、すみません。　失礼いたします。」

再びパソコンに向かい、キーを打つ康太。

N「その時、職場にいた人のスマホに緊急地震速報の着信音が、けたたまし

く鳴り響いた。」

（緊急地震速報の音）

N　「その数秒後、康太の勤めているオフィスビルが、少しの間、小刻みに揺れたかとおもえば、すぐに大きく音を立てて揺れ始めた。」

（大きなごう音）

同僚「これは大きいぞ。南海トラフがきたんとちゃうか。　はよ、机の下に潜れ！」

N　「康太を始め、職場全員が各自の机の下に潜り、身の安全を図り、揺れが静まるのを待った。

オフィスの照明が消えた。停電だ。

それから、どれだけの時間が経っただろうか。実際は、２、３分く

らいだったが、康太には、もっと長い時間のように感じられた。手の小刻みな震えが止まらない。揺れが静まると、各自、机の下からびっくりした風で出てきた。気持ちが次第に落ち着くにつれ、康太は、自宅に残した妻花子と母のことが、心配になった。」

康太「大丈夫だろうか・・・。」

N「康太はスマホを手に取ったが、呼び出し音ばかりで通じない。その数分後、職場中にスマホの着信音が再び、けたたましく鳴った。大津波警報を知らせる音だった。」

同僚「ええ、やばいぞ。ここは高いから、大丈夫やと思うけど・・・。」

N　「十数分の静粛のあと、遠くから
何とも言えない唸るような音が
聞こえてきた。　津波が来る音だ。」

同僚「来たぞ！　津波が来たぞ。」

N　「揺れが収まり、窓から外の様子を
見ていた同僚が叫んだ。
ビルの下を舐めるように、津波が
押し寄せてきた。幸い、水の高さ
はそう高くならず、鉄筋構造のビ
ルも壊れなくて済んだ。
しばらくして、第二波が再び押し
寄せてきた。それは、第一波より
高く、みんなを不安がらせたが、
なんとか持ち堪えた。」

康太「大丈夫かな・・・。ちゃんと、
安全なところに、避難できた

だろうか・・・。」

N

「長い喧騒のあと、静粛が訪れた。みんな、何も喋らない。喋れないのだ。電話の音も、なにも聞こえない。

康太は、スマホを取り出した。幸い、電波は大丈夫だ。花子に再び、連絡を取ろうとしたが、呼び出しの音声が虚しく聞こえるだけだった。

RADIKOのアプリを開いてみた。地元の放送局に、合わせてみると、被災情報が流れていた。市内の多くは、地震とその後の津波で、ほぼ壊滅状況だった。道路や橋も多くは被災して、通行できない状況らしい。

康太は、ビルの外に出てみたが、辺り一面、瓦礫だらけで、原型を

留めない建物も多くあった。
幸いにして、康太の勤めるオフィスビルは災害備蓄がされていて、辛うじて、急場をしのぐことができた。
康太達、職場の仲間は余震が続く2日間を職場で過ごし、備蓄が尽きつつある3日目に、最低限の職場復旧のためのスタッフを除き、自宅の方向へ帰った。
康太は待機中、何度も妻の花子と連絡を取ろうとしたが、かなわなかった。

康太「ない・・・。なにもかも・・・・。」

N「康太は自宅があった場所にいた。
地震とそれに続く津波で、建物の基礎以外は、その原型を留めず、すべて、流されていた。」

康太「花子は？　母さんは？　どこ・・？」

N　「康太は、呆然とした気持ちが頭を支配し、しばらく状況がつかめずにいた。一縷の望みを持って、地域の指定避難所である小学校へ急いで向かった。

（色々な声が行き交う、避難所）

N　「康太は、避難所での受付を終えると、名簿に目をやった。急いで書いたであろう避難してきた各自の名前が乱雑に書いてあった。」

康太「あった！　花子」

N　「沢山の名簿の中から、花子の見慣

れた字を見つけ、安堵した。」

康太「母さんは・・・？」

N「康太の母の名前は、何度名簿の中を探しても、見つからなかった。」暫し、その場で立ちすくんでいると・・・。」

花子「パパ？　パパ！！」

N「半べその花子が、駆け寄ってきた。」

康太「花子！　よかった！　ごめん、連絡が取れなくって。」

花子「こちらこそ、ごめん。急いで逃げたので、携帯、家に忘れて来ちゃった。でも、非常持ち出し袋は、パパが準備してくれてたので、それは急いで持って避難したおか

げで、ここでは助かったわ。
でも・・・。でも・・・・。義母さん
が見つからない。　何度も探したの。
でも・・・。」

（地震発生直後の自宅にて）

花子「義母さん！　大丈夫？」

母「大きかったなあ・・・。こんなに大きいん、久しぶりじゃ。」

花子「義母さん！　逃げるでよ！　津波が来るでよ！」

母「いける。いける。津波や、けえへんわ。　あんた、逃げ。」

花子「義母さん！　お願いやけん！
時間がないでよ！」

N

「花子の必死の説得虚しく、腰を上げようとはしなかった。

ほどなく、避難所に逃げる途中の近所の人も駆け寄り説得したが、応じようとはしなかった。

避難所の外は、静粛が支配するなか、普段と変わらぬ真夏の青空が広がっていた。

耳を澄ますと、遠くに、岸辺に打ち寄せる波の音が、微かに聞こえてきた。」

（終）